

昭和前期における

岐阜県の綴方教育(二)

高橋 弘

一

大正期末の、特に大正十年後半から十三年前半まで、「岐阜県教育」誌には、ほとんど毎号と言ってもいいほど綴方指導に関する論文が掲載され、活気を呈している。その中心を占めたのは、いわゆる随意選題論争ということで、女子師範附属小訓導の村山四郎三郎と師範附属小訓導の梅沢英造の主張が展開され、その成り行きが注目された。しかし、大正十二年三月、村山が東京へ去り、次いで十三年五月、梅沢が三十七歳の若さで恵那・巖邑小学校長として赴任すると、「岐阜県教育」誌上に綴方教育に関する実践論文は、急激にその数を減じた。その状況は次のようである。

大正13 5月号 綴方教授に於ける鑑賞について (二)

岐師附属小 梅沢英造

大正14 4月号 生活方法としての學習

岐女師附属小 横山 晋

大正15 5月号 所謂生命の綴方に就て 岐師附属小 川口半平

昭和2 2月号 童謡についての一考察 岐女師附属小 横山 晋

〃 4月号 童話の創作 岐女師附属小 横山 晋

〃 8月号 學習としての綴方教育 岐師附属小 川口半平

昭和3 5月号 學年末に於ける綴方科の作業 加茂・西白川小 熊崎卯一

昭和4 4月号 綴方指導の一反省 岐師範教諭 瀬戸重次郎

〃 6月号 尋一初期の國語生活 岐女師附属小 今井譽次郎

〃 〃 兒童文集の編纂 本巣・船木小 高橋 生

〃 8月号 手紙文の指導系統案 加茂・下佐見小 熊崎卯一

〃 11月号 綴方に於ける生活指導 本巣・二色小 関谷六三郎

年間僅か一点というような年度が三、四年続き、昭和四年頃から再び綴方教育についての論文が増え初めている。

一見したところ、岐阜県全体の五年間の点数としては、いかにも

少ないわけで、従って、この間の岐阜県の綴方教育は停滞していたと考えられがちである。しかし、論文の標題を見ると、これまでには見られなかった「生活」「生活指導」「生命」、あるいは「童謡」「童話」「児童文集」といった言葉が出てくるようになる。このことは、綴方教育が、新しい方向を目指そうとする時期にさしかかっていたこと、その中で、教師たちが新しい実践を模索しながら進んでいたことを物語っているように考えられる。

そこから、書き手としての子どもの心、生活、そしてその表現としての綴方作品そのものに教師の目が注がれるようになったことが考えられる。岐阜県において、児童文集の作成が盛んになり始めた^{注1}のが、ほぼこの時期と重なることも、その一つの現れと見ることができるであろう。また指導者、学校の偏りはあるにしても、「赤い鳥」に掲載された子どもの綴方作品数の多さが、全国的にみて五指に入るほどであった^{注2}ことも、同じように考えることができる。

新しい綴方教育への取り組みにまず動き出したのは、師範学校附属小訓導川口半平、女子師範学校附属小訓導横山 晋を中心とするグループの人たちである。

横山 晋が、「生活方法としての学習」を書いて、初めて「岐阜県教育」誌に載せたのは大正十四年のことである。その中の「学習作業化と生命化」の項で横山は次のように書いている。

學校は完全な生活場であつてほしい。随つて一般社會から、或は自然界から切りはなした特別な社會でありたくない。併しながらそれでない事實を余りに多く見出す。

さうした例を綴方の仕事の間に、探して見よう。

子供たちの綴方の題材になるものを見ると、多くの場合家庭に於ける生活乃至何處か他に行つた場合の生活、兎に角學校に於ける生活以外に於てそれを求める。尚時によつては、學校内の運動場なり、教室に於ても時間外の場合が多い。

かうした事實から私は何を得ただらう。それだけ學習時間といふものなり、或は學校といふものが、彼等子供たちの感激に無關係にあることを指すのではなからうか。換言すれば、そこに彼等の生活欲求に即した生きられるよろこびが、存在しないことを意味するんぢやなからうか。尚そこには、彼等が生きてゐないといつても過言ではなからう。……

現在の學校には計畫がありすぎる。随つて生命的の仕事がだん／＼減つて来るやうに思はれる。爆發的の生命の觸發がだん／＼その機會を失ふ。

すべてを計畫的に、すべてをプランの進行のまゝに進めてゆかうとする教育は、あまりに早く完全圓滿な人間を作りすぎる。

……これは子供の生活を生活させないことから來たのだ。……

〔岐阜県教育〕大14・4)

今から七十数年前に書かれたこの内容には、現在の学校教育においても十分に考えねばならぬものを含んでいて、新鮮さが感じられる。

こうした教育の考え方に立って横山は、昭和四年頃までに「岐阜県教育」誌に載せた前掲諸論文のほか、「北斗」誌に「『ことば』の持つ形象と国語教育」(昭4・7)などを発表していく。

一方、女師附属小に隣接する男師附属小の川口は、すでに前任の揖斐・大和小在任中から、「岐阜県教育」誌に「童謡について」(大10・11)、「童謡教育」(大12・10)、雑誌「小學校」に「童謡教育私見」(大13・5)を発表し、梅沢英造の後任として師範附属小に移ってから前掲のような諸論文を「岐阜県教育」に載せ、県下に認められるところとなっていた。その川口が、綴方教育についての考えを次のように述べている。

……茲に於て問題となるのは、新時代の綴方指導が單に個人的な生活觀照のみにとどまらず、新しい拓野として環境批判、社会批判の上に立つべきであると云ふ叫びについてである。教育が時代的責務から免れた閑人的な仕事でなく、時代に奉仕し、更によりよき時代を形成する機運を醸成してゆく勇敢なるべき

仕事である以上、私はこの叫びに深い共感をもつ者であるが、茲に反省を要することは、飽くまでも兒童の眞實な生活表現の上に立つべきであると云ふことである。

インテリゲンチヤの家庭に於ては、社會問題に對して批判の語を交すことは常にあり勝のことである。それを傍で聞いてゐる子供が、ことばの上だけの受賣をして文に書いたものを、恰も子供の生活から生れたる尖端を行く新時代の子供の文なるかの如く輕信してこれを賞揚し、概念の綴方より脱却して折角生活表現へまで進んだ綴方を、再び概念文へ引戻すの愚に陥らないやう心すべきであると思ふ。

都會の生活が一樣でない如く、地方の生活も亦ある限られた土地に於てさへ一樣ではない。地主もあれば小作人もあり、荷馬車を挽く者もあれば店を出してゐる者もある。其の家々の境遇によつて、子供も亦それ〴〵異つた生活の中に置かれて居る。其の各の**生活を母胎**として綴方は生れ出づべきだ。我が前にある子供の現在の生活を足場とせずして、一般的な子供の生活の緊密性を失つた環境整理に没頭してゐた爲に、生活表現は徒に空唸りして今日に及んだ。

概念的な標望からさめて、生活表現の綴方の眞意義を凝視せよ、これが私の希求するところの要点である。……

〔綴方に於ける生活表現の意味〕昭5・5、岐阜県教育

これも現在においては当然のこととして受け入れられる主張であるが、川口の場合は、横山に比べてもう少し幅の広い視点をもって書かれている。

男子師範附属小と女子師範附属小とは校地が隣接し、師範学校の卒業年次が横山・大正六年、川口・大正七年ということもあり、二人の綴方教育に対する考え方も、基本的には同じような方向をとっているということになれば、いきおい往き来する機会も出てくるであろう。川口半平がその著『花ぐるみ』の中で、「そのころ私たちの間では、気の合った者が集まって話し合う、自然の会ができていた。これは何年か前から、いつとなしにできたものだったが、」と書いているが、二人のつながりを想像させるものである。

昭和四年、加茂・坂祝小から女師附属小へ、今井營次郎が転任してきた。今井は、その著『教育生活五十年』の中で、

坂祝でのわたしの綴方実践は、生活綴方などとは言わなかったが、実践はたしかにその方向に進んでいた。一九二七（昭和二）年に、学校では、はじめて「ラインの光」という学校文集を発行した。……

と書いているが、川口の言う「気の合った者が集まって話し合う」会のメンバーにすぐ今井が加わったことは、間違いない。

男師、女師両附属小の訓導の中から生まれたグループによって、綴方指導についての新しい方向が模索され始めた昭和四年、まず三月に、「赤い鳥」が休刊となった。

鈴木三重吉は、「赤い鳥」復刊のための会員の確保、支部の設置を要請して全国各地を講演して廻ることになった。

次いで十月、「綴方生活」が創刊された。

この「綴方生活」発刊の経緯については、翌年八月号までこの雑誌の編集兼発行人になった志垣 寛が、創刊号の「月旦・隨筆・雜録・紹介」欄で、そのことについて触れているが、その要点は次のようである。

（一）大正十四年六月に創刊された学年別の児童雑誌『讀方綴方鑑賞文選』と云ふ彪大な読者を有する子雑誌を母胎として計画された綴方研究向上発展の特殊雑誌であること。

（二）「綴方生活」発刊の中心となったのは、野村芳兵衛、峯地光重、上田庄三郎、小砂丘忠義、小林かねよの五名、そして志垣 寛が相談にのったこと。

（三）「野村も上田も小砂丘も小林も、峯地もみんな新教育の熱烈な主張者であり支持者であり、教育それ自體の熱愛者である。彼等の懷抱する教育思想、彼等の中に燃ゆる教育愛の吐き場、それがほしかった。」それが「綴方生活」であること。

このようにして生まれた「綴方生活」創刊号は、「吾等の使命」と題して次のような巻頭言を掲げた。

「綴方生活」は綴方教育の現状にあきたらずして生まれた。いな單に綴方教育の一分野のみでない。現代教育の全野に於て満たされぬ多くのものを見出すが故に、微力を顧みず敢て出發する。綴方生活は新興の精神に基き常に精新澆刺たる理性と情熱とを以て斯界の革新建設を企圖する。その目ざす所は教育生活の新建設にあるが、その手段としては常に綴方教育の事實に即せん事を期する。

「綴方生活」は教育に於ける「生活」の重要性を主張する。生活重視は實に吾等のスローガンである。

本稿の冒頭に紹介した横山、川口の綴方教育についての所論、今井の思いなどは、子細に見ていけば、「綴方生活」のこの巻頭言で主張する考え方との違いは出てくるであろうが、綴方教育の現状、現代教育全野へのあきたりなさについて、新興の精神をもって、革新建設を企圖するという意気込みや、教育における生活重視という主張は、岐阜の附属小グループの心に強く訴えるものがあつたに違いない。

また、「綴方生活」発刊の中心となり、毎号綴方指導についての論文を発表している野村芳兵衛が、川口半平と師範学校の同窓であ

り、大正十二年まで女師附属小訓導として、村山四郎三郎らとともに、新しい教育を志向して活動していたことは、附属小グループと「綴方生活」との結び付きを、一層強くした要素と考えられる。

二

「綴方生活」創刊号には、三か月後の昭和四年十二月二十五日より四日間、東京市神田區駿河臺國民中學會講堂で新綴方研究講習大会を開催する旨の予告が、二ページにわたって掲載されている。

第二号には、「普く新鋭の同志を糾合し、綴方は固より廣く現教育界の全野に互つて、吾らの意圖する革新の第一聲をあげんとす。奮つて参同を乞ふ。」という大会の趣旨を述べた社告と、二ページにわたる新綴方研究講習大會々員募集の広告が載せられ、第三号にも同様、社告と会員募集の広告を掲載している。

この募集広告によると、四日間にわたる大会の内容は、一つは噴々の講師の講演によって「凡ゆる方面から綴方の根本的論究闡」をすること、もう一つは「此機に教育新人の大提携を劃」すことの二つから成っている。講師及び演題は、

一、我國國語教育の根本的缺點

東京高等師範學校教授

兼附属小學校主事

佐々木秀一

- 二、表現・心・学習 東京高等師範學校前訓導 千葉春雄
 - 三、綴方教育の無限成長 『教材王國』主幹 奥野庄郎
 - 四、詩及童謡の教育 北原白秋
 - 五、文章の評価 『綴方生活』主幹 志垣 寛
- とあり、さらに

協議問題 綴方指導系統案の作製について

意見交換 意見発表者

- 岐阜師範訓導 川口半平氏
- 山形師範訓導 村山俊太郎氏
- 児童の村訓導 野村芳兵衛氏
- 鳥取縣上灘校長 峰地光重氏
- 展望編集長 上田庄三郎氏
- 鑑賞文選編集主任 小砂丘忠義氏
- 綴方生活同人 渡邊義人氏
- 綴方生活同人 門脇英鎮氏

茶話會及藝術鑑賞

などが計画されている。

「綴方生活」同人が、全国的な規模での月刊雑誌を創刊する、という大きな事業を始めたばかりのところ、併行して研究講習大会を計画し実施に移すことには、多大の困難が伴ったことが予想され

る。しかし、敢えて「綴方生活」創刊三か月で、しかも創刊した年の内にこの大会を行うことが、社告にもある「新鋭の同志」をあまねく糾合すること、「綴方は固より廣く現教育界の全野に」互って課題を追求すること、といった「綴方生活」の目指す革新の方向が、より広く、より確かに理解され、より支持者をふやすことになるのではないか、という思いがあつたに違いない。

「綴方生活」の「綴方研究講習大會前景氣」というコラム欄には 初めての試みでどうか知らと心配してゐるが、この様子では 大成功、北海道から千島から、朝鮮から、鹿兒島から殆んど全國からの申込みだ。熊本縣玉名郡からは郡の綴方委員八名が舉つて申込み。岐阜からは男女師範の訓導がこれも五六名連名で 申込み。……（第二卷第一号）

とあって、年の暮れという条件の悪さにもかかわらず、綴方教育の新しい方向を求める教師たちに、強くアピールした試みであつたことが分かる。岐阜からの申し込みは、意見発表者として名前の載つた川口半平のほか、横山 晋、今井誉次郎、鷺見臣一郎、塚本義夫の女師附屬小グループのメンバーであつた。

大会を終えて、主催者の一人志垣 寛は、「綴方生活」（第二卷第二号）の中で、

まず僕はあの會がまき起こした渦のいかに大きかつたかに驚

いてゐる。自分乍ら全く驚いてゐる。嬉しさで一杯だ。

集つた同志一百八十人！

一百八十人とはよくも集つたなアと吾れも驚き人も驚いてゐる。大塚の高師附属主催する講習會には無慮七百人の會員が集つてゐる。たつた一百八十名何でそれが驚異であるか？

諸君、日本といふ國はそれほど官々僚々たる國である。

天下の高師だ、ばりばりの訓導諸君のお集りだ、轡を並べての講演だ。七百人は何のその、千人も千五百人も、集つた例しもあり可能性もあるが、さて吾等の綴方研究會は實に全く野人の試み、さ、やかなる同志の計劃のみだ。綴方生活といふ初めた許りの小さい雑誌に根城をもつた同志の仕事だ。だのに一百八十名。

しかも吾等の驚異はその量的成功を云ふのではない。集つた一人一人の魂の清さ、熱の強さ、力の旺盛さ、求めて止まぬもの、持ち主——總じて若く澁刺たる一人一人であつた事である。この一人は凡常百人の聴衆にまさる。この百人はやがて新興日本の教育を荷ふもの、昨日の教育に蝕めるその日その日を徒費するの人々ではなく、今日の悩みと明日の建設に、己れ乍らをひつぱたきつ、ある闘士たちである。(後略)

〔綴方研究講習大會雜記〕

と、手放して大会成功の喜びを語っている。大会終了後間なしに書いた主催者の文として、うなずけるものがある。

同年五月の「綴方生活」には、二月八日夜の話し合い、と断つて「講習回顧座談 新時代への動き」と題する記事が載せられている。出席者は、当日の講師千葉春雄、志垣 寛、あとは「綴方生活」同人の野村、上田、渡邊義人、門脇英鎮、小砂丘であるが、この座談の中で、千葉が注目すべき発言をしている。

正直にいへば、冬のあれでは〔筆者注・前年十二月末に開かれた新綴方研究講習大會〕

僕らのもつてる思想と聴講者の思想にかなり隔りがあることを感じた。あれはあの講習の特長だと思ふね。あんなやんちゃな主催者の所に、あんな大勢集つたといふことは、その集つて來た人々のものと僕らのもつてゐるものとは、劃然たる隔りがあつたよ。僕らが講師として招かれて行く時には、少くも或る意味で、僕らの方が時代の先驅者のやうな風があるのが普通だつたが、ところが、今度のあの會では、みんながはるかに新しく、ずつと向ふへとび出してゐた。

また、この大会に、意見発表者の一人として参加した川口半平は、戦後著した『作文教育変遷史』の中で、この大会の意義について次のように述べている。

この大会の意義は、講習の内容よりも、地方の元気な新人が

一しょになって、互いに意見を交換し、氣勢をたかめ、自信をもち合い、手を握り合ったことにあった。これは、綴方が新しい方向へ進む気運をつくった最初の会として、記念すべき会であつたといえよう。

志垣、千葉、川口それぞれ立場の違いはあるが、「綴方生活」の創刊、それに引き続いての新綴方研究講習大会の開催が、若い、新しい綴方人によつてこれからの綴方教育が手がけられていく、という気運を醸成している——そういう時代の動きを感じ取っていることが分かる。

ところで、この大会での意見発表者は、「綴方生活」第三号（昭和4・12）の最終案内では、岐阜の川口半平ら八人となっていた。ところが当日になってみると、綴方教育研究発表者（案内の意見発表者）は、今井譽次郎、横山 晋ら五名が増えて、全部で十三名であつた。川口、今井、横山と、岐阜県の発表者が三名を占めたことになり、附属小グループの積極性と熱意が窺われる。

この大会での講演、意見発表は、「綴方生活」臨時増刊《新興綴方教育講話》としてまとめられているが、岐阜県からの三名の発表の概要は次のようである。

・岐阜のこどもは岐阜の謠を

今井譽次郎

こどもの生活、特に遊びの生活の中には、うたが多い。学校唱歌が童謡唱歌に代つて来たことは、明らかにこどもの生活のうたへの進展であるが、童謡唱歌はやはり多くはステージの歌である様だ。遊びつつ作業しつつひとりでに其のリズムに合つて出て来る様な謡、坐つていても寝ころんでいても走つていてもうたえる謡ではなかつたようだ。それから、従来の童謡の教育は、要するに、こどもたちが作らせられ、うたわせられる教育であつた。こども達の内部的な豊かな心を即興的にはつらつとうたわせるところの、うた心の啓蒙の童謡教育ではなかつた。これからの童謡はもっと動的前進的全生活的直接的であり度い。

シモ、シモ、

イツオリタ。

ユンベミンナガ、ネトルウチニ、

コソツ……トオリタ。（かすれた擬声で）

と言つてこども（尋一）は落葉を集めた山の上でおどつている。うたのリズムが山の弾力のままに流れ出て、こどもの全身のリズムが此の童謡の表現をする。即興的な創作であるとともに、未分化的な舞踏である。童謡教育の出発点を此処に置き度い。即ち現行の教科目の姿を借りて言えば国語、唱歌、体操が合一された姿である。そして次第にこれが詩へ、音楽へ、舞踏へと分化されて来ても、われ

くは、即興的にうたい且つおどるところの未分化的全生活的態度をわすれてはならないと思う。

・自己の紛失

川口半平

綴方界は今日に至るまで盛んに論議が交されて、まるで各学科の尖端を行くといった感じを抱く。こうした有様は確かに綴方を向上もさせたが、又一面に於て多くの人々に、静かに考えさせる余裕を失わせ、ともすると右に聞き左に聞くに忙しく、自分というものを忘れさせた弊があつたと思う。今の綴方界で一番大切なことは、教授者自身、失つた自分を喚びかえすことにあるのではないか。

次に最近一つの反動として子供の綴方を無性にあげめ奉ることが流行る。ヤレ子供の文は至醇だ、けがれざるものの響きだ、宝玉だ、光だなどと言う。子供の文のよさが分らずに形ばかり気にしている指導者も困り者だが、しかし子供の文と言えは無い処にもつたいをつけて、それ程でもないものまで持上げて感激している指導者も微笑ものだと思う。どれもこれも曇らざる童心の現ればかりかどうか、赤はだかの生活から生れた作品ばかりかどうか、二三人の作品ではない自分の学級全体の綴方に目を通して、本当に物を言つてもらいたいと思う。

或人が子供の文は彼等の純真な生活の上に咲いた花だ光りだと、如何にも天国に近づいたような事を言っていたので、私は、「花と言ふよりも、綴方は子供の生活の糞だ」と言つた。こなれない物はこなれない假で出て来る。又それによつて私共は其の子供の内的活動のようすや、健康さを見て行くことが出来る。そしてなるべく雄大な奴をこくよう指導していくんだ。花と眺める時、人は美しいものを愛する余り、貧しいもの萎んだものを見過ごし易いが、糞と眺める時、私共は先ず貧弱なもの、腹具合の悪いものに対して、より深い注意を喚起される。そこに愛撫があり、親愛の情がある。

自分と今共にある子供達の日々の文に直面して、そこからにじみ出た本当の心得を語り合いたい。雑誌や著書で仕入れただけの、華やかなしかし概念的な言葉が如何に私共の世界に流行っていることか。人の意見を傾聴するのはよいことだ。人の研究を多く識るのはもちろんよいことに違いない。しかしそれは、自分の魂を育て進めていく上に於てだ。新しい提唱、新しい思潮、新しい哲学、そんなものが起る度に我先に囁りかけることは結構だ。囁る所に向上もあり進展もある。だが、新しい本を読みながら、むづかしい言葉で話合いながら、いつまでも自分の心が痩せていては始まらない。

・「子供のことば」に対する再検討

横山 晋

現在の多くの子供達の綴方作品の中に存在している「子供のことば」に就いては、少なからざる疑問を持つ。ここで言う「ことば」は、単なる言葉を指すのではない。心と言葉との全一なる状態を指して言うのである。更に考えを進めると、心——生活（こころ）そのものの問題となる。子供自身のイデオロギーの明瞭しない生活（こころ）の表現である「ことば」は、駆逐したいと言うのだ。

子供達の生活（こころ）には、必然的に或るイデオロギーが存在して来る。だが子供達には、「子供」というユニークな相の存在から直接的に、端的にイデオロギーを持つよりも、もつと以前のすがたに於て、彼等が彼等なりの素直な生活（こころ）に映じたものを持つだけのゆとりを見出せない程に、幾多のものが入れられ過ぎている。「綴方」という概念を教師の文話や、鑑賞文などから、身動きの出来ない程までに持たせられている。従って子供達は、折角ユニークな自分の生活様式を生かす能力を持ちながらも、それを惜しげもなく振り捨てて、狭い教師の生活様式の中で自分をいかそうといふような、極めて価値のない動きをやっている。彼等自身、それに気がつかないで当然のこととしているのも堪らないことだが、彼等がそうした生活態度を持って来たことを得意然としている教師を見せつけられることは、より以上に堪ったものではない。子供から眺めた人事自然の動き——すべてにそれ／＼ユニークな生活様式が

あるはずだ。従つてそこには、彼等のイデオロギーが認められなければならない。

解放だ、解放だ。子供でもない大人でもないような「ことば」で、殆ど百パーセントに塗りがためられている子供達の作品から、子供達を潔く解放させることだ。

短い発表時間の中で、実践から生まれた学級の子どもの作品を効果的に使つて童謡指導の本質を述べた今井。熱気溢れる会場の中で、綴方指導に当たる教師の自己確立はなされているのかと、冷静に問題を投げかけた川口。「生活」を「こころ」と読み、そこから生まれる真の「ことば」を、子どもが自在に使えない綴方指導の現状にメスを入れようとした横山。三者三様ではあるが、その基底に流れるものは、この時期の綴方指導が、そして教育が、真に子どもの側に立つて、その豊かな、本質的な成長を図るものとなっているか、の問題意識である。

現在の作文指導、学校教育の中でも傾聴すべき内容を盛り込んだ岐阜県の発表は、もちろん三人の優れた実践的研究、思考に基づくのであるが、平常のグループの集まりにおける意見交流、討議による問題の深めが、大きな力となっていることを感じさせる。

ともあれ、四日間にあたる大会の雰囲気、若さに溢れる参加者

の、綴方教育への意気込み、新しい教育への情熱を一層高揚させたことは間違いない。川口半平は、

……この上京によつて何となしにジツとして居られない程の衝動をうけた。歸つてから綴方を眞面目に考へ直して見た。そして綴方に對する自分の立場の轉回を記念する意味で、寶文館から『生活共感の綴方』を出版した。

〔綴方と僕〕・《綴方生活》 昭9・11月号

と、自分の著作に結び付いたその時の心情を書き、今井譽次郎も、東京から帰ったわたしたちは、いっそう熱心に綴方指導をやった。

〔『教育生活五十年』 一九六九年）

と回想している。

東京での新綴方研究講習大会に、岐阜から参加した人たちが中心になって、翌昭和五年八月に、岐阜市で「新興綴方講習会」を三日間にわたって開催することになるのも、東京大会の熱氣溢れる雰囲気、同志の人たちとの交流、そこから受けた感動、——そうしたものが基盤にあったのは間違いない。

三

昭和四年十二月の新興綴方研究講習大会に川口と一緒に参加した横山、今井、鷺見、塚本たち女師附属小のグループについては、そ

の頃の岐阜女子師範学校附属小学校の校風や、同校勤務の職員で構成されている北斗会の会員が同人となって創刊した「北斗」誌のかかわりも見えていく必要がある。

『日本新教育百年史 5 中部』（小原国芳編・昭44）で岐阜県の一部を執筆した岸 武雄は、「このころの付属は、今日では想像できないほどの大きな指導的立場をもっていた。……しかし、岐阜の両付属は、その校風にそれぞれ特色をもっていた。」とした上で、次のように述べている。

男子付属は、専属付属という性格からか、全般的に保守的傾向が強く、新教育といっても、教科内容において進歩的要素をとり入れて改善をはかっていくというやり方であった。川口半平が「生活開発の綴り方」を唱え、桜井良治が童話を教育にとり入れ、国の法制化に先んじて「話し方」を国語の中に特設し、西脇圭一が毛筆ばかりでなく、早くから硬筆を導入したことはその例である。

ところが、女子付属は代用付属という性格も手伝ってか、学校経営として、時の流れをいち早く導入し、実践していくというムードが満ちていた。これは、堀 桑吉の実践にもっともよく出ているが、また有名な弾圧事件を起こした作文教育なども、横山 晋・今井譽次郎・鷺見臣一郎・福田 実・森島益茂・塚

本義夫など、若くて活気に満ちた連中が、教科のわくにとらわれず、進歩的な綴方教育を実践した。

そのころの男子付属にいた梅沢伍郎は「男子付属はどちらかといえば東京高師付属の思想的系譜に属していたし、女子付属は奈良女高師付属および在野の進歩的教育家の影響が強かった」と語っているが、あるいはそうかもしれない。とにかく、男子付属は、県立としての落着きを示していたのに対し、代用付属としての女子付属の方は、やや野党的存在であったことは事実のようである。

また別の項目の中で、次のようにも書かれている。

国語教育の面からながめても、男子付属は、梅沢英造・加藤氣作・西尾彦朗・川口半平・桜井良治等、どちらかといえばどっしりと手堅い伝統が保たれていたが、女子付属の方には、横山晋・野村芳兵衛・今井誉次郎・福田実・鷺見臣一郎・塚本義夫等、いわゆる野党的な荒武者が揃っていた。

ここには挙げられていないが、女師附属小には、綴方の随意選題について論陣を張った村山四郎三郎も加えることができる。

こうした女師附属小の校風の中で、昭和四年七月、「北斗」が創刊された。四六倍版五十六ページ、発行者は「岐阜縣女子師範學校附屬小學校内北斗會」となっている。

この「北斗」創刊の頃を回想して、森島益茂が次のように書いている。

女師附属の長髪属はどうもこの頃からはやつたらしく、同時にそのすじでは氣に入らぬふうであつた。けれどそんなことは一向おかまいなしに、さつそう？と長髪をなであげて授業をしたものである。横山さん、沼田さん、福田君、恩田君、小生これを受け、鷺見君、今井君、この辺が超長髪の部類で、それ以後ずつと若い者の間で長い間続いたようである。……別段名前はついていなかったが、大てい土曜日の晩誰かの家へ集つて、……今井君が加はつた頃から、何とかしてわれわれの機関紙をもちたいという話が出て急速に計画が進められた。先づ最初は金の問題であつた。四六倍版 部五〇頁位で大体二十銭、……年三回学期末発行、希望者に実費で頒つ、といった案で、最初のうちは、同人自費出版全県下に寄贈する位の努力でいこう、といったなかなかぎせいの出版であつた。それだけ鼻息もあらかつた。

誌名は全校職員から募集し、投票によつて決定、最初の頃は今井君が編集を一手に引受けて育てたものであつた。……

《三十年も前のこと》「北斗」46号・昭28・6

この一文からは、当時の女師附属小の職員の氣風や、学校の雰囲気

気が伝わってくる。また、今井譽次郎が附属小へ着任してから三か月余りで、同人誌「北斗」の創刊の仕事をやりとげたことも明らかになってくる。

「北斗」創刊号で、同校主事小川卓爾は次のように創刊の辞を述べている。

これは、北斗會同人の機關雜誌である。

教育の道に精進するもの達が、より正しき道を求めんとして、より高き生活を見出さんとして、驚駭に鞭打ちつ、進む生活の記録である。

時々の研究や感想や創作などを、筐底にのみ収めて反省しないのは、自らを進める所以でない。その熟否を問わず批正を仰いでこそ進歩を見るのである。整はざるもあらう、自分勝手な熱もあらう、喜悅も出よう、苦悶も出るかも知れない。然し飽くまでも、眞摯と自由と澁刺さとを失はずして進みたい。若し一句たりとも、一行たりとも何等か益する所があれば幸甚である。

大方の御批判を得て求むる道への正しき足取りとしたい。

貧しき記録ではあるが、出来得る限り永く育て上げたい望である。

男師附属小には、すでに大正十二年三月に創刊された「研究」と

いう名称の研究誌がある。その内容は、各教科部ごとに、教科指導研究をまとめたものが中心になっており、第二号から付された「彙報」と共に、県下各小学校への教育経営・指導の指針ともなれば、という意図を持ったものである。

これに対して「北斗」は、小川主事の「創刊の辞」からも分かるように、その基盤を女師附属小の教師一人一人に置いている。創刊号の目次を見ると、「クロッキーに就て（山本鼎氏講演抄記）」から始まり、「文化教育学一面観」（小川）、「ムーテユアルカルチュアールのエックステンションとプロモーティングムーヴメント」の強調（塚本）、「訓練論」（可児）、「新しき童話と教育」（今井）、「現今の学校体育に関する考察」（横幕）の五編の論説。「『ことば』の持つ形象と国語教育」（横山）、「文字から『ことば』へ」（船渡）、「私の直観科」（福田）、「国史教授に対する卑見と其の取扱ひ」（高橋）、「国史教授と郷土史の連関」（藤吉）の研究五編。「空」（三田村）、「微笑」（森島）など六編の随筆。「教師と子供」欄は「純情」（奥村）、「和風」（広瀬）の二編。創作欄は、童話（今井）、詩（横山）、童謡（森島）、短歌（船渡）と、内容は多彩であり、男師附属小の「研究」とは対照的なものとなっている。

編集の都合でできたスペースに、今井が埋め草として書いた短文

が目を書く。

◇ 勤勞教育、公民教育——これも概念病にかゝらないでやりた
いものです。／ 概念をはつきりして、然も本當にやるこ
とですね。どうせ教育ですもの、まるつきり新しい内容ではな
いからね。／ 體驗を叫ぶより、自ら體驗をすることだ。
教育者の生活の中に、所謂生命哲學のいふ體驗生活がどれ程あ
つたかしら……

◇ 中央でも地方でもだが、入學難よりもつと憂鬱な教育問題
がありはしないだろうか？／ 生活難の暴濤と、明日の
パン問題より見れば、入學難なんて全くのんきな沙汰だ。／
所謂プロレタリアの教育——これが、如何なる方面から見ても
實に重要な問題だ。

◇ 農村青年の結婚難に就いて眞實に考へて下さい。／ 財
産家の子女は都市の女學校で都市的な教養を受け無産者の子女
は工場で都市生活をする。／ 堅實優秀なる農村青年であ
ればある程、其の配偶者を得るに悩みます。

「北斗」第三号（昭5・3）では、鷺見臣一郎が「歌は生まれるの
だ」を載せ、その結びの部分で次のように述べている。

綴方は自由選題で、子供達は自由に自分の生活を、自分の言
葉で、自分の文で表現することができる。

圖畫は自由畫、子供達は自由に自分の思想なり生活なり、對
照から受けた氣持ちなりを、自分の色で、自分の線で表現する
ことができる。

書方は藝術書方への進展によつて、今迄のお手本の引伸作業
から、素張らしく自由な表現に突き進まうとしてゐる。

唱歌の時間に於てのみ子供は全然自己を認められない。野原
や山で愉快に歌ふ彼等の生活の歌とは、丸で別な唱歌という存
在だ。

歌は生れるのだ。子供は彼等の遊びの生活の中に生れた澤山
の歌を持つて居り、又生みつゝある。最後に、R先生（筆者注：こ
少論で筆者が実例として挙げた唱歌授業の指導者は、子供に對する盲目症で、子供の
生活から、唱歌を切り離して考へてゐる、認識錯誤乃至は不足
患者であることを附記する。

こうした新しい時代の到来を感じさせるような「北斗」誌の内容
について、「岐阜縣教育」（昭5・9）に、諧謔的な軽いタッチで書か
れた一文が掲載された。その一部を抜き出してみると次のようであ
る。（筆者注・原文はほとんど一文ごとくらいに行替えがされてい
る）

とう／＼北斗が烽火をあげてしまった。大聲で——元氣な聲
で、みんなに喚びかけてしまった。ギョツ！と何かを掴んでし

まった。どうせ、こんなことになるだらうとは思つてゐたが……。だがどうだ、其の輕快極まる躍進振りは……心憎い澁刺さは！

◇

ところで、吾が岐阜縣教育よ。お前は一體どうしたらいい、と言ふのだ。お前はまだ枯れちやゐない筈だ。だのにまるでお前は枯木そっくりぢやあないか。……

◇

お前の足元から碧空を衝く筈のやうに、ノコノコニュツと出て、蕚然鎧袖一觸的に君臨してしまつた北斗の若衆を仰いで見て、お前はどんな氣がするのだい？ その陰にかくれてしまつて、見えないやうなお前は無念とも何とも思はんのかい？ そりやあ一面お前のお株までかつぱらつちまふ程な氣の利いた若衆の出たことは目出度いにも何も大に祝福して可なりなんだがね。(後略)

(「たはごと」 早川杜史)

「岐阜縣教育」では、異例に属することだが、この一文の後に「記者曰 早川君のたはごとは眞實だ。」として、その内容にコメントを加えている。その中に、「……北斗が輝しく進出したのは同人が皆北斗を自分のものとして各自に眞摯な意見を發表したからだ。」というくだりがある。

年三回発行される「北斗」を通して、県教育界の目が女師附属小

教師の、特に二十代から三十代初めの若い教師たちの言動に注がれるようになったことが分かる。綴方東京大会に参加した横山、今井塚本、福田、鷺見は、この「北斗」の同人として活躍していたのである。

四

現在の学校では、学校運営の全体にかかわるような事項については、運営機構として定められた校内組織に従って、まず学年会や教科部会、各種委員会などで、それに所属する教員が話し合い、次いで職員会で意志統一が図られ、具体的な取り決めがなされ、実践に移されて行く、というのが普通である。

この当時の女師附属小の場合は、先の「北斗」創刊に至る経緯で見たように、組織の枠を越えた自由な集まりの中での話し合いから生まれたものが、学校として検討され、実現されていくという、枠にとらわれない、自由な雰囲気があったことが感じられる。昭和五年夏に、「新興綴方講習会」を岐阜で開催するについて、その企画運営の中心になったグループの場合も、この一連の流れの中でとらえることができる。「北斗」46号(昭28・6)に、鷺見臣一郎が寄せた「さきの追放記」から、少し長くなるが、この間のことを見てみたい。

私は、昭和三年四月に揖斐から加納に入った。当時の主事は井上啓三郎先生、……職員に十分デイスカスの時間を与えられた。……次の主事は、当時師範学校でも新進気鋭の誉れも高かった小川卓爾先生。そらは青空、わしら若い連中は、喜び迎えてはり切ったものだった。丁度、時代が自由主義の爛熟期で、とてもものび／＼した自由な雰囲気がただよって……中略……そのころ、私はまだ独身で、丹羽康平（明徳小）と二人で、加納の新柳町に、小さい家を借りて共同生活をやっていて。炊事当番は一日交代で、献立がきまっていた。……

やきぶたの夕

とき 明土曜 五時から

ところ 新柳町 鷺見宅

会費 五十銭

こんなことを職員室の掲示板に堂々と書く。そして集つて来た連中と……勝手な放談をする。

こんな時、何となく集つて来たものは、横山 晋、塚本義夫、森島益茂、福田 実、今井誉次郎、所 勝二といった連中で、文学を語り、教育を談じ、人生を、恋愛を、映画を、演劇を、人物を、貧乏を、手あたり次第喋りまくつたものだ。

こうした自由人的なグループが、何となくできて、それがみ

んな志願して一年生の担任となつた。（といつても、塚本、森島、所などは一年生ではなかつたが）

こどもをまず解放すべきだ。彼等の意欲に於て学習は進められるべきだ。こどもさながらの生活をみつめよ。文部省の教科書はなつちよらん、今までの教育の誤りを正せ、といった調子で、思い切つた自由な形で一年生教育をやつた。

カリキュラムコンストラクションという言葉は当時からあつた。未分化なこどもの生活に即した教育計画を立てるべきだ。教授細目も、科目別々では駄目だ、オーケストラの総譜のように、各教科がそのポジションを占めると同時に、各教科が一つの渾然たるこどもの生活としてひゞく和弦とならなくてはいけない等、勇ましいことを言い、勇敢に、一生懸命にこの考えを実行にうつした。

こども達は、すつかり野に解放されて、たくましく／＼と伸びた。が、外部からは不安と批判があり、職員会では、アカデミックな人々から、手きびしい批評をこうむつた。然し、批難があろうとあるまいとおかまいなく、こどもたちと遊び、たのしみ、子どもたちは次々とすばらしい作品を生んだ。……

ところでこのグループは、当時男師附属に居られた川口半平さんも加えて、綴方のサークルを作り、赤い鳥の鈴木三重吉を

よんだり綴方生活の志垣 寛をかこんだり……後略……

ここには、この時代、僅かに残されていた自由な雰囲気の中で、教育の革新を信奉して、ひたむきに、自己の信ずるところに従って突き進む若い教師たちの姿がある。

昭和五年七月、鈴木三重吉が岐阜へ来た。前年三月で休刊になった『赤い鳥』を復刊させるべく、会員を募り、支部設置を意図して、各県を講演して回っていたときだった。目当ては、福富高市が勤務する長良小学校での講演にあったが、その前日、川口や女師附属小のこのグループが中心になって、三重吉を附属小へ招き、座談会を持った。前掲驚見の回想文の中に、「鈴木三重吉をよんだり」とあるのは、この来岐のときのことである。

横山 晋は、この時の鈴木三重吉の話などを基にして、「北斗」

第四号に「時代の眸」という短編を載せた。

作品の中では、講演を終わって控室へ戻った講師の薄田氏に対して、当日の係をしていた者のうちの入江と中川の二人が、「プロレタリア文学についての先生のお考えをお聞かせください」と、話しかけるところから始まる両者のやり取りと、その中で明らかになっていく薄田氏のプロレタリア文学否定論。また、宿へ帰った薄田氏を訪ねた小学校長が、小作争議の問題などを綴方に書く児童の指導について教えを乞うのに対し、「そんなものなんか極力排斥すべき

だ」から始まる薄田氏の子供の綴方についての考え方がもろに表面に出ていて、文学作品としての熟成度はどうかと思われるが、興味を引かれるのは、女師附属小の横山たちのグループが、この時期、鈴木三重吉の『赤い鳥』綴方の行き方に疑問を持ち、「綴方生活」の方への傾斜を強くしている、ということである。

しかしそれでも横山は、戦後『綴方生活』復刻版・月報』で、記者の『綴方生活』を支持して『赤い鳥』をやめる、ということはありませんでしたか』という質問に、

両方ともっていましたね。『綴方生活』を支持して、『赤い鳥』の綴方には批判を持っても、それだからやめるということとはありません。

と答えている。

川口半平は、その著『花ぐるみ』の中で、この時の三重吉の来岐の様子について述べたあと、

私たちはもちろん『赤い鳥』復刊運動には好意的であったが、それ以上にいかにして生活させるかという生活綴方の方向へ、急速に傾いていた。

何か革新を予想させるような空気が感じられ、待望されるような時代であった。私たち綴方人はだれもが新時代の理解者をもって任じ、あたらしい教育はわれわれによって、という意気

に燃えていた。

と書いている。しかし同時に、横山の場合と同じように、それが「赤い鳥」との決別を意味したのではなかった。川口は、日本の綴方教育史の上で、三重吉が果たした役割、「赤い鳥」綴方の持つ意味を高く評価しており、昭和六年一月の「赤い鳥」復刊に際しても、推薦者の一人となり、購読会員として多数の冊数を購入するなど、力を添えている。

「赤い鳥」から「綴方生活」へという時代の流れの中で、川口や横山のように、一つに割り切ることをしないで、たゆたいながら、それでも全体としては時代と社会のなかで生み出された新しい思想、指導法に共鳴してその研究、研修に力を注いでいく、というのが当時の状況ではなかったのだろうか。

とにかく、昭和五年七月頃の岐阜県には、特に県教育の中核と目されている両師範附属の若い教師たちの中に、時代の流れを感じとって、ひたすらに「綴方生活」の提唱する道への傾斜を強め、その道を歩みつづけようとするものがいた、ということである。それが前年末、「綴方生活」主催の東京での講習大会に参加した、岐阜からのグループのメンバーである。

男師附属の川口を交えた女師附属小の今井たち若いメンバーには、そのときの高揚した気分は忘れられず、大会が終了したときに、

「次はこの会を岐阜でやろう」と口々に言いあったことも心に残っていたはずである。「北斗」を創刊し、思いのままに手放しの自由主義教育に取り組んで、意気軒高たるものがある若いグループの女師附属小の教師たちに、「この夏、岐阜で『新興綴方講習会』を開催しようではないか」という気運が盛り上がってくるのも、当然の成り行きだったといえることができる。

岐阜で講習会を開催することの具体的な計画が、いつの頃から始まったのか定かではないが、昭和五年のそんなに早い時期から着手されたのでもなさそうである。この間のことについて、川口半平は次のように書いている。

この講習に最も乗り気で、一ばんこまめに働いたのは今井營次郎だった。始めこの講習を県内相手ぐらいに考えていたのを、全国的にひろげたのも主として彼の大ぶろしきによるところが多い。

何べんか寄り合って、会の名は「新興綴方講習会」、会期は三日間ということにし、「綴方生活」はもとより、その頃週刊として全国に出ていた「教育週報」にも広告を出した。「三百人寄るだろうか？」というのを「何、六百人は確実さ」ってわけで、汽車の半額券も出すといった鼻息の荒さ。一同の役名も營次郎の案で、執行委員長横山晋、副委員長がばく、書記長

今井誉次郎、執行委員鷺見臣一郎、福田実以下ずらりと名をならべた。

〔人間教育〕

一方、横山 晋も、「綴方生活復刻版・月報 NO・4」の中で、最初は岐阜県内だけの小規模の講習会を考えていた。それを、全国的な規模のものにした、ということの背景には、今井君の「大ぶろしき」といわれる企画性とそれを実行に移していくエネルギーの発揮があった。……

ただ、『綴方生活』（八月号）誌上で宣伝してもらうには、もう間に合わない、というほど急な計画だった。全国の教師に知ってもらうために、教育新聞の『教育週報』紙上に広告を出した。それと、全国から教師が集ってくるには、鉄道運賃の割引きの必要がある。もし所定の割引人員に足りなかった場合には、その不足人数分の割引きを、主催者側が負担せねばならない。だから、『教育週報』の広告料のほかに、国鉄運賃割引を申請して「赤字」を出したら、どうするという心配がありました。それを今井君が「運賃割引アリ」という広告を出すことに押し切った。……

と回想している。

「北斗」創刊に今井が果たした役割と同じように、この岐阜での新興綴方講習会の開催についても、今井の強引とも思えるような取

り仕切りと、積極的な行動力があったことが分かる。なお、横山が言うように、「綴方生活」には載らなかったが、「教育週報」に載った広告の項目だけを見ると、次のようである。

新興綴方講習會

一、児童文と生活指導新指標

野村芳兵衛

一、最近の文學と綴方

志垣 寛

一、全日本児童綴方作品批評

小砂丘忠義

一、綴方教育の現實と指導の遊戲

千葉春雄

▼期日八月七・八・九日（三日間）▼会場岐阜県女子師範學校

講堂▼会費壹圓五拾錢（申込と同時に鉄道五割引證を御届します。）▽會員交歓座談會▽長良川鵜飼遊覧 會員中の希望者には鵜飼遊覧、日本ライン遊覧についても便宜を計ります。

主催 岐阜縣女子師範學校付属小學校内 岐阜新教育同好會

このようにして、會員申し込みを受け付けることになった。

川口半平によれば、「東京の会が二百名足らずだったので、せいぜい三百名以上集まれば成功と予想を立てていると、北は北海道から南は九州にいたるまで、申しこみ殺到。八百人を超える盛況に、会場も初め予定の加納小学校講堂から市の公会堂へ移し、旅館との折込に係が目を回す」（『花ぐるみ』）というほど、全国的な関心を集める状況になってきた。そして、昭和五年八月七日、岐阜市公会

堂に八百人という会員を集めた「新興綴方講習会」が開かれたのである。大阪朝日新聞の岐阜版（昭5・8・8）はこれを次のように報じた。

綴方講習会 岐阜新教育同好會主催の新興綴方講習會は、七日午前八時から九日まで市公會堂で開催。講習生は小学校教員で遠くは北海道、朝鮮、関東州等全國から集まつたもの七百余名、講師は八名である。七日午後には日本ライン舟遊、八日夜は長良川鵜飼を見物するはずである。（「会と催」欄）

五

三日間にわたる「新興綴方講習会」の内容、そこで話し合われたことの綴方教育上の意義、あるいはこの種の大会がいわゆる「地方」で初めて開かれる意味などについては、これだけ規模の大きい全国的な会になったのであるから、その記録等が、綴方の全国雑誌「綴方生活」や、少なくとも岐阜県で開催されたのであるから「岐阜県教育」誌、大会運営のメンバーを多く出した女師附属小の「北斗」誌ぐらいには掲載されて然るべき性格のものである。

しかし、同時代的に、岐阜での「新興綴方講習会」について書かれたのは、管見によれば次の三つである。

（一） 「岐阜紀行」 門脇英鎮 昭5・10 「綴方生活」

會員七百十八人、會場を附属の講堂から、市の公會堂にうつしたと云ふ盛況で、會場前には、地方別に受附をつくつて、同人炎天中の活躍ぶりだ。もう、志垣氏のキンキンする聲がホールの中に飛んでゐた。あんなことは綴方をやるくらい先生なら、いくら田舎の人でも知つてゐさうな常識で自然主義文學を説いてゐた。……野村君の話は、僕も勉強のために、みつちりきいた。面白い。哲學から來た理論は、自分は性格的に好きだから仕方がない。……

次の日、野村君の話の後で小砂の話をきく。おつとりした小砂らしい重さと味とで、作品をよみながら話してゐる。どこへ出ても、同じ調子だ。親しい友達をこんなところで見てその人間のふだんの性格が、一層強く出てゐるのを見ることはうれしい。小林さんの話は美しかった。話材も、言葉も、話ぶりも、小林さんらしく、すぎがなくて美しかった。中島の漫談「チャヤブツシオ」も面白かった。ふだん無口の男が、あんなにこきみよい口調で話が出来るかと思ふと意外であつた。……

第三日、小砂の話がすんだころ刑事が來て傍聴した。何んしろ、千葉氏の綴方の話を刑事が聴いてゐるのだからおかしい。その間に少し材料の整理をして午後簡単に話をする。……

（二） 「綴方と僕」 川口半平 昭9・11 「綴方生活」

……その夏「綴・生」の同人を岐阜へ招いて講習會を開いた。全國から集まる者七百人といふ盛況だったが、思想問題の嫌疑で特高課から出張するといふ騒ぎになり、會後主催者側は全滅となつて、左遷やら謹慎やら、参謀格の今井君はフン然として退職、上京してしまつた。……

(三) 「岐阜」(創作) 江馬 泰 昭6・2・3 「綴方生活」

(講習會も最後の第三日の朝である。)

「もう、時間が來ましたね。始めませんか、會員の集りも良い様です」

そこで高井が、ベルを押した。

佐々尾が壇に立つた。

佐々尾の話が終つて、次の春山と交代した時、特高課の××がやつて來た。

××は主催者側の一人に名刺を渡して

「どうも此の講習會は赤いといふ評判だからやつて來た」

と言つた。××は座席の前の方に腰掛けて講師の話を聞いてゐたが、綴方教育の理論は一向分らぬらしかった。けれども何かしら手帳に筆記してゐた。と同じ様に此の講習會の初日からやつて來て頻りに手帳に覚書してゐる縣廳學務課の××があつた。

特高の××は學務課の××に耳打してゐた。……

ここに書かれている文章の中の、「刑事」「特高課」「思想問題の嫌疑」「赤いといふ評判」など、こうした言葉は、岐阜の講習會で何があつたのかを知ろうとする当時の人々をしりごみさせるに十分なものであつた。そして、日中戦争から太平洋戦争へと戦争の激化に伴う戦争協力体制の進む教育と、それに並行して厳しさの加わつた思想の取り締まりによって、いわゆる「岐阜の綴方事件」は、綴方教育の表面からは消えようとしていた。

昭和五年夏の、岐阜で開催された「新興綴方講習會」の全体像が次第に知られるようになったのは、戦後、この講習會の企画運営に当たつた主だった人たちが、回想の文章を書き始めるようになってからである。講習會に触れて書かれた主なものを見ると次のようである。

☆横山 晋

◇「生活教育の歩みと作文事件」(『岐阜県教育の回顧と展望』昭48)

◇「岐阜の講習會前後」(「綴方生活」復刻版・月報NO4)

☆川口半平

◇「あのころのこと―新興綴方騒動記―」(「人間教育」昭26)

◇「作文教育変遷史」昭33

◇「花ぐるみ」昭49

☆今井誉次郎

◇『教育生活五十年』一九六九年

☆鷺見臣一郎

◇「さきの追放記」昭28（「北斗」46号）

ここでは、『作文教育変遷史』（前掲）『日本新教育百年史 5』（小原国芳編・昭44）にも引用されている「あのころのこと——新興綴方騒動記——」から、新興綴方講習会のあらましを見てみたい。

……ところではいよいよ蓋をあけて見ると、予想以上の盛況で、北は北海道から西は九州にいたるまで申込殺到というありさま。喜んでいると、かんじんの「綴方生活」の中で、経済問題から社主の志垣と、編集者の小砂丘らがけんかをおっぱじめ、分裂一步前ということになった。気にしていたがそれでも、どうやらやって来たのが、志垣 寛、野村芳兵衛、千葉春雄、小砂丘忠義の外に詩人の門脇英鎮、漫画家の中島菊夫、女流教育家の小林かねよといった面々、長髪を風になびかせて、赤い風呂敷のようなネクタイを結んだ一くせも二くせもありそうな連中が、暗雲をはらませて乗りこんできたのだから、県学務課が目を見張ったのも無理からぬしだい。

学務課長の中村亀蔵が公会堂の前でその中のだれかを見て——多分小砂丘だろうということになっている——「あの、モジャモジャの頭をした者はだれか？」とたずねた。側近の者が「ど

うも今度の綴方講習会の講師のようであります」と答えると、眉をしかめて「その講習をとり調べよ」と命じたということが、伝えられている。

何はあれ、会場の公会堂は階上階下いっぱいという景気。講師の話は大したこともなかったが、会員の発表がはじまると、血の気の多い連中が集まっているのと、旅へ来た気やすさもあって、だんだん尖鋭的になって来た。

山形の工藤恒治が、ズウズウ弁で、満州の汽車の話をして、階級的差別の不公平をアジっていると、思いがけなく、聴衆の中から刑事がこのこ出て来て注意を与えた。

ぼくは鳥取の佐々井秀緒から階上で彼が今度出す綴方の本について聞いていたのだったが、工藤が注意を受けてマゴマゴするのを望んで、彼奴案外腹ができてないじゃないか——なんて話合ったことを覚えている。

翌日、ぼくは腹を下して休んだが、志垣との話はとうとう岐阜で談判破裂して、彼（志垣）はその夜大阪へ発ったとのことだった。

三日目は大したこともなく、しまいの座談会には千葉春雄が渋いのどをきかせたりして無事にすみ、「しっかりやれよ」「うん、がんばるよ」ってわけで、遠来の友をおくって、会は

おわった。

ところが無事にすんだのはその会だけで、当局ではこのよからぬ不穏分子どもを如何に処置すべきかについて重大な会議をひらいていたわけだ。

目標が集団的に大抵する加納小学校に向けられたことは是非もないし、結論的にいうと、今井誉次郎、鷺見臣一郎、福田 実、塚本義夫といった不良分子の中心は田舎の学校にそれぞれ分散左遷され、横山 晋は翌春をまって武儀郡の小さい学校の校長に流されることになった。もっとも誉次郎はフン然と退職し、上京して「綴方生活」へはいった。

森島益茂はこのグループへ足を入れていたが、日頃の行状よろしき旨をもって宥免され、奥村 保はかしこくも途中から足を抜いたので問題にされなかった。

ぼくは、附属という特殊地帯にいたせいか、師範学校長によばれて叱られただけでどうやらことずみとなり、この問題はようやく幕をひいた。

前掲のように、川口の外に新興綴方講習会については、主催者側の中心であった横山、今井、鷺見が当時を回想して書いているが、それぞれ内容に精粗があり、また、細部において食い違いが見られたりする。しかし、だれもが共通して取り上げている事実は、

(一) 会員の意見発表のとき、山形県から参加した工藤恒治が意見を述べていると、聴衆の中から刑事が出てきて、その発言内容について注意を与えた。そして、会終了後、特高の取り調べを受けた者がいる。

(二) 夏休み明けの九月及びその年度末の人事異動で、新興綴方講習会の主催者として活動した女師附属小の横山、鷺見、福田らが地方の学校へ転任させられ、今井は退職、上京した。という二点である。

まずこの問題について考察を加えてみたい。

(一)

講習会開催の少し前、今井誉次郎は岐阜日日新聞に「県教育会改造論」を四日間わたって連載した。

今井がこれを書く発端になった事件は、「岐阜県教育」(昭和五年・七月号)に「元本會書記福手勘太郎不始末事件及之が善後措置概要」として載せられているが、要は、福手が教育会会計主任の立場を利用して、七千五百五十円余りの公金を費消していた、というものである。その時の新聞に載せた記事の内容について、今井は概略次のように述べている。

……わたしは「一旦これを(筆者注・当時の岐阜県教育会)を倒して、新組織のもとに、真の我等の教育会を樹立することを望むもので

ある」と書いて、「県下四千の教員会になっていいのだ」「そして純然たる我々の自治機関にしなければならない」などと述べていた。また、「すでに全国町村長会が、一致して教員給料引下げを決議している時代において、小学校教員が一大団結を望むことは、実に当然すぎるほど当然なことである」と書き、

「県小学校教員会は、臨時総会を開いて、町村長会に対抗するくらいの意気は持ちたいものである」などとも書いている。

また、「現在の教育制度に対する不満」「教科書に対する不満」なども、この教員会で決議せよ、といている。このほか「教員会を消費組合実践の場にせよ」などとも書いて、県教育会のやり方のすべてを、こっぴどくやつつけている。

（『教育生活五十年』）

横山 晋が、「綴方生活」復刻版・月報の中で、「……当時は一般に、インテリ・文化人・学生などの急激な左翼化が、大きな潮流となって押し流していく時代でした。若い教師たちのなかには、そうした影響をうけて、急進的な傾向のものも相当出てきておりました。」と話し、川口も『花ぐるみ』の中で、「当時インテリの間では左翼思想が風靡していて、指導的な思想雑誌は、こうした傾向の人々によって占められていた。私たちのなかまの間にもソシアリストを装う傾向があり、私もそのころソシアリズムに心をひかれていた。」

と書いているように、思想・労働・争議等は社会的に大きな問題となっていた。この頃の教育に関係した事項を中心に、社会の状況を見てみると、

昭和3・4 文相、共産党関係学生・左傾教授らに、今後弾圧

方針をとると決定

東大新人会・京大社研に解散命令

〃 7 内務省に保安課新設、警保局に特別高等警察新設、

憲兵隊に思想係をおく

〃 10 文部省に学生課設置

昭和4・6 教員の俸給未払い・減俸・くびきり等全国的に起る

〃 7 文部省に青少年教化のため社会教育局、学生思想

調査指導のため学生部を設置 （『日本の歴史』）

不穏な社会状況の拡大と、それを力で押さえ込もうとする政府権力者のやり方がはつきりと現れてきているのが分かる。

今井は、前掲の文に続けて、「この記事を、本校（女子師範）の校長が見て、わたしをよんで、『君の書いていることは正論で、わたしも賛成だが、一教員としては、つつしんだほうが身のためにいい』という注意を受けたことを書いている。

「県教育会改造論」の記事は、新聞に拠らず今井の著書に拠った概要ではあるが、そこで主張される内容、使われている言葉を見る

限り、当時の社会状況にあっては、一校の校長の注意で済まされる範囲をはるかに越えた問題であったことが分かる。

公器としての新聞に書いたということは、多方面のいろいろの立場の人の目に触れたことを意味している。打ち続く社会不安事象の中、この所論が、特に思想問題に神経を尖らす特高警察の目に留まらぬはずはなかったであろう。

今井誉次郎には、この新聞記事以前から、警察・特高課の注意を引く問題があった。

このころ岐阜市に「赤い茶屋」という喫茶店を経営している石川某という人がいて、左翼運動でよく特高につかまったことが、新聞に出ていた。ようやく雑誌『戦旗』などを読んで、左翼運動に興味を持ちはじめていたわたしは、どうかしてこの石川という人に会ってみたいと思っていた。それでこの「赤い茶屋」へ何度か行ったことがある。多くの青年がいて、元気に左翼的なことを話していたが、石川という人はあまり店に出ていなかった。話し合うあいだにもいなくてだまっていたわたしは、この人に会う機会を作り得なかった。

当時わたしは、『少年戦旗』を郵便で取っていた。小学一年生の受持ちであったから、それを子どもたちに見せようなどと思っていたわけではない。『戦旗』などは町で売っていたが、

『少年戦旗』は町で売っていなかったもので、直接購読したのだった。
（『教育生活五十年』）

新興綴方講習会が終わって、今井は下宿先を特高に調べられている。『教育生活五十年』によれば、特高は『少年戦旗』が目当てであつたらしく、「君は、『少年戦旗』をどこから手に入れているのか」と尋ね、それを郵送してきた帯封を見つけて、「あつた、あつた」と見せ合つて喜んだ、とある。

また、今井は講習会当日、会場で特高に呼び出され、会の経費について聞かれている。

「講習会費は、ひとりいくらか。」

「三日間分が一円五十銭です。この会費でも千名だと千五百円になります。」

そのころこの種の講習会では、会費二、三円取るのが普通であつた。

「そんな会費でやっていけるのか？ どこからか金はいっているのではないか？」

「いいえ、大丈夫やっていきます。一泊三円の宿泊料や講師の謝礼や会場費などは、他からもらわなくても、充分まかなえる。」

わたしは事実をありのままに答えた。

（前掲書）

新興綴方講習会を、実質的に取り仕切っていたのが今井譽次郎であるから、所要経費のことを本人に尋ねたと言えはそれまでであるが、内実は、前掲のような折々の今井の左翼的言動が、岐阜での綴方講習会と左翼組織との結び付きを疑わせた、ということのようである。横山 晋は、前掲「月報」の中で、

……岐阜県には当時、無産階級運動をすすめる組織団体がありませんでしたから、そういう左翼運動の団体の後押しがあつて、講習会開催のお金なんかもその方面から出された、と思つたらしいのですな。それで講習会場に特高のようなものがやつてきたし、私服の警官も入つておつたそうです。こちらは、全然知らなかった。……何ら他の団体とのつながりはありませんでしたから、調べれば調べるほど、何も出てきやしません。けれども、「赤い講習会」と書きたてた新聞もありましたから、世間に多少の疑惑を与えたということもあつて……

との受け止めを話している。

岐阜における新興綴方講習会は、川口や女師附属小のメンバーの意図した新しい綴方教育の方向を求めて、全国の同好の士と交流する、ということから全く離れて、左翼的なイデオロギーの宣伝・鼓吹の場と見做されてしまったわけである。

(二)

次に、講習会の企画・運営に、中心となって活動した関係教員の処分について考えてみたい。

昭和五年九月三十日発行の「岐阜県教育」の叙任辭令欄（昭和五年八月二十一日至九月二十日）には、次のように人事異動が報じられている。（※印は筆者注）

今井譽次郎 免兼職、退職

福田 實 任眞桑小訓導 （※本巣郡）

鷺見臣一郎 任美濃小訓導 （※武儀郡）

翌昭和六年の「岐阜県教育」五月号（五月二十日発行）の定期異動を報ずる叙任辭令欄には、

所 勝二 任出戸小訓導 （※武儀郡）

横山 晋 任金山小訓導兼校長 （※武儀郡）

塚本義夫 任中津東小訓導 （※恵那郡）

が載っている。いずれも、女師附属小のメンバーで、大会役員に名を連ねた人たちである。

それに先立って、「……学務当局がこの会の計画者を、不穏分子とにらんで、その処分を考えているという話が伝わった……」（川口）、「……わたしたちにらまれていたものたちは、地方の学校へ転任になるといううわさが伝わって来た。」（今井）という「うわさ」

が流れ、そして、

丁度私は、つかれを新柳町の家で丹羽と昼寝をしていた。そこへ学校から小使が、「主事先生がお呼びです」と来た。ところが私はすこぶる呑気で、やれ／＼折角の美睡をた、き起こされてとか何とか言い／＼それでも、はかまだけつけて学校にいった。すると福田、今井も来ていて、小川主事から転任の宣告を受けた。（驚見）

ということになったわけである。

考えてみると、三日間の新興綴方講習会が終わったのが八月九日。それから一か月もたたないうちに、しかも夏休み期間中に、県学務課はまず三名の異動を、極めて迅速に行ったことになる。

驚見は、前掲文に続けて、「そして色々あったが、既に決定済みとあって、福田と私はあっさり引きさが」ったが、今井は憤懣やる方なく、県庁の学務課へ出かけて行った。そのときのことだが、『教育生活五十年』には次のように書かれている。

九月九日に依願退職願いをふところにして、わたしは岐阜県庁で中村亀蔵学務課長に会った。当時学務課長は、県の教育界ではいちばんえらい人であった。わたしが課長に会っていると、新聞記者が何人か来ていた。課長はただちに願いをきき入れて、……退職金などの手続きをしてくれた。……

その翌日の新聞を見ると、どれにもわたしのことがでかか出ていた。今、そのときの新聞のスクラップの一部を見ると、「……今井誉次郎氏は去る三十一日付を以て依願退職となったが、これに関し同氏は、……県学務課長を訪問し、抗議を申し込み、角泡を飛ばして激論を交した。今井氏の抗議の理由は『（前略）理由を聞かせてくれといっても明答せぬのは、了解ができぬ。或いは自分の抱く思想につき、県当局が軽率な判断をくだしたかも知れぬが、もしそれが事実ならば甚だ遺憾である。』」というのである。同氏の更迭については、雑誌『戦旗』の購読者で（中略）この方面の研究をしていたのが理由の一つであり、また氏は県教育会攻撃の急先鋒となり、なおまた中央と相呼応して、教員連盟を組織しようと計画していたことも、その理由だとうわさされている。」

などと出ている。

（『教育生活五十年』）

地方の学校へ左遷されることを拒否し、辞表を提出した今井誉次郎は、女師附属小の先輩で「綴方生活」の同人でもある野村芳兵衛を頼って上京し、「綴方生活」を中心に綴方教育の上で活躍することになる。

講習会実施の副委員長を務めた、男師附属小の川口半平の場合は、次のようであった。

会の計画者を処分するとなると、私も免れることはできないと思った。しかしなんで処分されねばならぬのか、わけがわからなかった。今井誉次郎など、特高に調べられたということだったが、私は別にだれからも調べを受けることはなかった。山崎主事が、

「校長から大分君のことを聞かれたよ」と、話してくれたが、山崎さん自身大して気にもしていないようすなので、私も別に気にしないでした。

すると、ある日校長室へよばれた。

近藤校長は眼鏡越しにじっと私の顔をみつめたまま、講習会の事情を聴取した。

校長は講習会を不穏なものとは感じていないようだったが、好意は持っていないようだった。したがって部下の訓導が、そんな計画のなかま入りして問題を起こすなんて、不愉快なことでだというようすを、明らかに示した。そして、

「附属は教生指導という重要な任務があるから、軽率な言動は慎むべきである」

という意味の訓戒をした。

——附属はクビだな。

そう思いながら、私は校長室を出た。(中略)

私だけは現状のまま、附属に残った。山崎さんの好意によるものか、附属という特殊性のおかげか、それとも日ごろの行状よろしかったせいかわからずじまいになっている。

(『花ぐるみ』)

と書いている。

この顛末を見るにつけても、この処分には、「危険思想を持つ、影響力の大きい危険集団は、芽のうちに根絶させる」という方針の官憲による、「見せしめ」のようなものではなかったか、という感じが強い。

特高警察に、要注意人物としてマークされていた今井誉次郎を初めとする女師附属小内の綴方グループが、綴方講習会を企画し、全国から好ましからざる人物を集めて、綴方教育研究を口実にして左翼的イデオロギーの宣伝・連帯を図ろうとした、ということにして、学務課に強権的に圧力をかけることは、この時代には容易なことであつた。

岐阜県教育をつかさどる学務課としても、「綴方生活」が「吾等の使命」として掲げる「現代教育の全野に於て満たされぬ多くのものを見出すが故に……」とか「その目ざす所は教育生活の新建設にあるが……」、「教育における『生活』の重要性を主張する……」等の考え方の具現としての学習活動を展開する女師附属小の今井、

鷺見、杉浦、福田、横山（主任）の学年グループを、このまま放置しておくことは好ましくないという判断が、殊のほか強かったに違いない。

この時期、県視学であった梅沢英造が、「岐阜県教育」誌の記者の質問に、立場上やむを得ず、しかし、自己の信念を語った内容が、「教育所感 視學梅澤英造氏談」という題で、「岐阜県教育」（昭和5・9月号）に掲載されている。

（前略）社會文化の度を進め、人々に最大の幸福を與へるその原動力となるものは人である。而して教育はその重要な人を作るが眞の目的である。

さて人を作る即ち人格を陶冶するためには、學校教育にあつてはあらゆる教科の綜合に俟たねばならぬは當然であるが、近頃わけて修身科、綴方科に於て一段の考慮を拂はれたいと思ふ。文学好きの若い教師や女教員などの中には、文藝の鑑賞、創作等に、優れた眼識や技量を持つて居るものもあるが、時には文藝にかぶれて極めて感傷的な氣分、弱々しい心の持主となり、遂には其の行爲が道德的現實性を失ひ、假象的非道德的なものとなり、忌わしい風紀問題を惹起する場合がある。尚一方に於ては、前者の弱々しさに對してこれは強い方面に其の弊が表はれる場合であるが、それはプロ文學の影響を受けたものにあつ

ては感情的な激發性と反抗的氣分とが結合して、思想の穩健を缺き左傾的な思想を有つやうになるものがそれである。

そして文藝好きの教師は動もすると文藝至上主義となり、文藝即教育であるかの偏見に陥り、教育のことは總てが之によつて行はるべきもの、如く考へるためか、文藝的陶冶に偏して、教育の一方面を見て他の方面即科學的、道德的陶冶を顧みず感情の眼でのみ物を見る憂があるから、兒童の品性陶冶の上に大いなる缺陷を生ずるのである。即ち感傷的な又反抗的な態度を、純眞な無邪氣な明るい快活な兒童に植ゑ付けることになるのである。

小學校の教科中文藝と最も關係の深い教科は綴り方であるが故に、文藝好きの教師のもつ態度は直接的に兒童の性情に影響するものである。殊に最近綴り方教科にあつては其の目的が生活を指導するのだとか、生活を表現するのだとか、生活を深めるのだとかいふ考へ方をするやうになつたのであるが若しも教師が前述の様な文藝好きから生じた弊としての感傷的氣分や反抗的態度の持ち主であつたら、其の指導を受ける兒童の生活がどんな風に進んで行くか、どんな傾向を持つて來るかといふことが察せられるではないか。

殊にプロ文學を謳歌する教師の中には、道德は鬭争を認める

のだといふ。闘争に依つて世の中は進歩するといふ。綴方を文藝であると考へ文藝はプロ文藝であると考へて居る教師が、綴り方に於て児童の生活を指導するとしたら、どうしても児童の綴り方即教科目としての綴り方とプロ文藝とを結合——混同——してプロ文藝のもつ内容或は生命に觸れしめやうとする。ひいては闘争殊に階級的闘争を肯定する結果を導き出すことになる。

綴り方は決してプロ文藝ではない。又單なる文藝でもない。もつと廣い陶冶價值をもつものでなければならぬ。況んや教育の全目的は文藝主義で達成せられるものではない。故に教師は文藝的修養を積むだけではないかぬ。教師は決して文藝家でもない、藝術家でもない。教師は教育家でなくてはならぬ。教育家たらんがために一方に偏することなく、自己修養に努めなければならぬ。……

雑誌発行の時期から見て、「岐阜県教育」誌の記者が梅沢視学に求めたものは、明らかに、「新興綴方講習会」をめぐつての、綴方教育、特に「綴方生活」に触発された附属小の綴方教育についての見解であつたと考えられる。

岐阜県小学校の国語教育、綴方教育をリードすべき立場にある附属小の後輩たちが問題視されていることについてであり、事の経緯を明らかにしないで済ましてしまおうという思惑も当局にはあつた

であろうし、梅沢にとっては、かなり苦しい立場にあつたことがわかる。従つて、一般的な見解表明になっている感があるが、引用した前掲部分では、後半のところ、附属小のグループに言いたいことではなかつたかと推測できそうである。

六

岐阜の新興綴方講習会が終つた八月以降、「綴方生活」も内部問題で編集発行人が小砂丘忠義となり、野村、上田、小林、峯地、門脇らも引き続き同人として参画することになった。上京した今井誉次郎は、「江馬 泰」のペンネームで同人に加わつた。

新しい方針で作られた最初の「綴方生活」十月号の冒頭には、次のような「宣言」（昭和五年九月付）が載せられた。

生活教育の叫ばるるや久しい。されど現實の教育にあつて、これこそ生活教育の新拓野であると公言すべき一つの場面を見し得るであらうか。（中略）

教育は無力であるか。果して教育は無力であるか。眞實に生活教育の原則を握り、その實現力としての技術を練るの道、これこそ若き日本教育家のなすべき仕事の中の仕事であらねばならぬ。

社會の生きた問題、子供達の日々の生活事實、それをじつと

觀察して、生活に生きて働く原則を吾も掴み、子供達にも掴ませる。本當な自治生活の樹立、それこそ生活教育の理想であり又方法である。

吾々同人は、綴方が生活教育の中心教科であることを信じ、共感の士と共に綴方教育を中心として、生活教育の原則とその方法とを創造せんと意企する者である。

創刊号の「吾等の使命」に比べて、旗色を鮮明にし、具体性を増したものとなっている。

上京した江馬（今井）は、息継ぐ間もなく、岐阜での憤然とした思いを吐き出すように、「綴方は行動だ」（10月号）、「階級層の上に立つ綴方」（11月号）、「誰だ、農園を荒すものは？」（12月号）と次々と論文を「綴方生活」に載せていく。

昭和六年四月号の「綴方生活」は「新しき綴方経営案」を特集し「綴方指導の出発とその計画」を中心記事としているが、その執筆者の顔触れを見ると、今井、横山、川口と、半年余り前、岐阜新興綴方講習会を主催したグループのトップが揃っている。

尋一 綴方の書きはじめての指導 今井 譽次郎

尋二 程度よりも行動形態として 横山 晋

尋三 自然観察生活観察 尋三綴方指導計画 野村 芳兵衛

尋四 尋四綴方新學年の感想 川口 半平

尋五 傾向性を重視する 南 砂雄

尋六 尋六綴方の出發と新計劃 峯地 光重

（後略）

この中の、横山 晋の書いている文の一部を見てみたい。この「綴方生活」四月号が発刊されたのは、横山が講習会開催にかかわったことで、半年遅れで附属小を出され、武儀郡金山小校長として着任したばかりの時であった。従って、この原稿を書いたのは、まだ附属小訓導のときであったと考えられる。

● 子供の社會性を健康に表現させよ

従来の児童文は、子供の社會性の歪曲された不健康なものが多かった。何がかく歪曲せしめたか。

第一に子供達の社會性を無視して、それを育み、それを健康に成長させなかつた。教師に對して、親達に對して、友人に對して、一般社會人に對して、尚それ等の属する一般社會機構に對して、前時代意識の招來せしめた奴隸道德が、彼等子供達をして、無やみに自己を卑下したり、あきらめに墮したり、他を支配する誇らしさを持たせて仕舞つた。しかもそれを當然な歸結だと思惟させ又行動させた。これは極めて不健康な社會であり、不健康な生活態度であらねばならぬ。

子供達の社會性の中には、鬭争やいたづらが胚胎することは

當然である。併しながら、斯うしたものが、多くの場合奴隷意識の爲に、健全な發達をもたらすことなく、不徹底な歪みを持つて來た。随つて不健康な奴隷意識は、益々その跳梁をほしいまま、にするだけであり、一方の子供達の生活力は、層一層にぶつて來て仕舞つた。

第二に擧げるべきは、一種の逃避的なナンセンスである。

これは前述の第一の原因の中にも當然内在するものである。一種の「あきらめ」から來る夢みたいな奴である。併もそれ自身一種の英雄主義的プライドによつて欺瞞されてゐるといふ畸形兒である。奴隷意識の中にあつて、奴隷であること（勿論奴隷であることには無意識であるほど、巧に欺瞞されて仕舞つてゐる）を得意とし、鬭争を既成道德下に於て、不徹底な欺瞞の狀態に置くことを得意としてゐる。かうしたセンチメンタリズムがかなりはびこつてゐるのを見受けないではゐられない。

……（中略）……

尚其の他にも幾多の原因があるだろうことは思はれるが、只今はこの二つについて、はつきりと認識したい。即ち斯うした事實によつて、子供達の綴方は、彼等の持つ社會性の、正しい認識と、強力な行動を阻止されて仕舞つて歪曲された社會性の中に、狭い生活をして居る狀態だ。（後略）

左翼調の漢語や難しい言い回しで綴られた、身構えた、力みのある文章、との印象が強いのは、この時代の、進歩的な教師をもって任ずる人たちの一部にあった特性かもしれない。が、いずれにしても、附属小を追われることになった横山の、意氣軒高さを物語るような一文である。

しかし、昭和六年四月、この一文とともに校長として着任した横山 晋の文章が、「綴方生活」誌上に載つたのは、これが終わりであつた。

「綴方生活」の同人として、東京に在住している今井誉次郎が、「綴方生活」誌上に論文等を次々と載せるのは当然として、比較的長く「綴方生活」とのつながりを持ったのは川口半平である。

川口は先に「流れた訓導・二幕」（昭和5・1）を載せていたが、綴方事件の起きた昭和五年八月以降も、「農村兒童の綴方について」「トムは何故吊つたか」（童話・昭和5・12）、「新しい世界へ」（童話・昭和6・5）、「忍びなさい・一幕劇」（昭和6・10）、「綴方と僕」（昭和9・11）、「思ふこと二三——村山君へ」（昭和9・12）、「指導理論として綴方の北方性なるものありや——鈴木氏の綴方指導精神とそのサンプル作品の検討——」（昭和10・3）、「明暗微笑図」（創作・昭和11・2・12・6）、「綴方の底面指導」（昭和12・5）、「女教師についての感想」（昭和12・7）と、途中三年ほどの中断はあるが、論考、脚本、童話などを書き続

けている。「綴方生活」は、昭和十二年十二月号をもって終刊となっているので、川口は最後まで「綴方生活」とのつながりをもっていたことになる。

次に挙げるのは、川口半平が「綴方生活」誌の「新卒業生諸君を迎へてこの地の綴方状勢を語る」という特集に書いた「綴方の底面指導」の一節である。

(前略)

1. 底面指導とは畠を耕すことである

前にも言つたやうに躍進綴方の話を聞き、本を讀み、思潮の波に踊つてゐると、まるで自分がその躍進線上にあるやうな錯覺に陥つて、よい氣持に酔つてしまふ。そこで大切な事は、本當に綴方はそんなにすばらしく躍進を續けてゐるかどうかを、手近く自分の畠に眺めて見ることだ。瑞々しく伸びてゐるか、勢いがよいか、根が張つてゐるか。

ところが、内容が貧弱で字がきたなくて、句讀點がちがつてゐて——いや第一何を書いてゐるのかさっぱりわからん。義理にも「これが生活表現の綴方でござい」と敬意をはらふ氣にはなれない。葉っぱで言へば恐ろしく痩せて蟲食ひの、浸しにも漬物にもならない代物と言ふことになれば、これはお膝元だけにほかつては置けまい。

何を置いても先ず畠を耕して、雜草をぬいて、いや其の雜草さへも碌々生えぬやうな、とても固い畠さへもあるんだから、精一ぱい耕してどんな芽にしろ萌え出すやうにせねば、いくら新傾向の花にしても、その花の咲かせやうもないではないか。

先生嘆じて「どうも僕んとこの組は……」なんて言ふが、大抵は組が悪いんじゃないやなくて、先生御自身のお仕事の方に考へなほして見ねばならん事が多いやうだ。綴方を語るなら先ず自分の組の作品を語るがよい。綴方を研究するなら、先ず本を讀むよりも何よりも、自分の組の作品を讀んで眞面目に考へて見る事が大切だ。綴方の進展はそこから始まる。

(中略)

3. 底面指導とは當然の位置へ還ることである。

綴方は何を目あてに進んでゐるのか。何が綴方の獨白の本態かと言へば「生活を文章にあらはす技術の錬磨」と言ふことであらう。そして自分に對しては「眞實を書く」ことであるし、他人に對しては「わからせる」ことである。かうした本來の目的を自覺して、これに實踐の熱意を示すならば、綴方は中途半端な煮えきらぬ足踏みをいつまでも續けて居ることから少しは免れ得るであらう。

生活指導を外にしては綴方の語れないことは事實にちがひな

いが、より大切なものにだん／＼煎じつめて行けば結局は「わかるやうに文を綴る」ことが綴方であるのだ。……（後略）…

この一文を書いた昭和十二年、川口は揖斐郡小島小校長であった。平易な語り口で、若い新卒の教員に、綴方の本質を語りかけている。特に、教員が子どもの綴方作品そのものを論じないで、理屈ばかりで綴方教育を論ずる状況を問題視し、綴方の究極のねらいは、「わかるやうに文を綴る」ことにある、と述べるところなど、川口が「綴方生活」一辺倒ではなく、「自分の綴方」の境地をつくり出していることを感じさせるものになっている。

前述したように、「綴方生活」は、昭和十二年十二月号をもって終刊となった。編集に当たっていた小砂丘忠義の死去に伴うもので、最終号は「小砂丘忠義追悼号」となっている。

大正から昭和にかけて学校での綴方教育、綴方指導に大きな影響を及ぼし、岐阜県においても、多くの子どもたちの綴り方の質的な向上が見られるような教師の実践を引き起こしていった「赤い鳥」と「綴方生活」が、昭和十年初頭に相次いで終刊になったことは、まことに残念な思いになる。

岐阜県の綴方・作文教育を考えると、昭和五年八月の、岐阜で開催された「新興綴方講習会」と、その後に続いた女師附属小教員の意に反しての地方への転任人事の持つ意味は何であったのか、を

究明するために、本稿では先ず、関係者の「回想文」を中心に、「事実」を明らかにしようと試みたものである。

注

- (1) 拙稿「大正期末から昭和前期における岐阜県の児童文集」
- (2) 拙稿「岐阜県における『赤い鳥』綴方概観——大正期末を中心にして——」（聖徳学園岐阜教育大学「国語国文学」第十五号 平成八年三月）参照
- (3) 岐阜新聞社は、昭和二十年、アメリカ軍の空襲を受け、社屋等一切を消失。現在は本社、県立図書館など、昭和年代十数年の現物、マイクロフィルムを欠いている

参考文献

- ◇『日本作文綴方教育史 3』滑川道夫著 国土社 一九八三年二月
- ◇『作文教育変遷史』川口半平著 岐阜県国語教育研究会

昭和三十三年一〇月

◇『花ぐるみ』 川口半平著 母と子ども社 昭和四九年八月

◇『教育生活五十年』 今井誉次郎著 百合出版社 一九六九年

◇『日本新教育百年史 5』小原国芳編 玉川大学出版部

昭和四四年六月

◇『岐阜県教育の回顧と展望』 岐阜大学教育学部

教育百年実行委員会 昭和四八年一月

◇『綴方生活』（復刻版）第一巻 ー 第十五巻

綴方生活復刻委員会 けやき書房 一九八〇年四月

◇ 同 配本付属の「月報」NO・1 ー 8

◇『教育ひとすじの生涯』 松野長蔵著

教育ひとすじの生涯刊行委員会 一九七一年六月

◇『北斗』 創刊号 ー 第四十六号

岐阜県女子師範学校附属小学校（戦後、

岐阜市立加納小学校）北斗会

昭和四年七月 ー 昭和二八年六月

◇『岐阜県教育』 三六八号 ー 四三三号 岐阜県教育会

大正一四年四月 ー 昭和五年九月

◇『教育週報』二六六号 昭和五年六月廿一日

◇『大阪朝日新聞』 昭和五年八月八日付